

桑野塾

桑野塾

検索

<http://deracine.fool.jp/kuwanojuku/>

大学などの研究者に限らず、興味を持って研究していることを自由に発表しあう「広場」です。どなたでもご参加いただけます。それぞれの興味が少しずつ重なり合うことで、新たな知見を見いだそうという場です。

第82回

2024年
11月16日(土)
15:00 ~ 18:00

早稲田大学 戸山キャンパス 36号館 682号室

★ どなたでもご参加いただけます。会場に直接お越しください。開場は14:30。

☆ 終了後、近くの居酒屋で懇親会を開催します。(要申込み・飲食費は別途)

※予約の都合上、懇親会参加をご希望の方は9月25日(水)までにメールでお申込みください。

※報告者・タイトルは変更の可能性もあります。ご了承ください。

参加無料



ソ連秘密警察幹部(スターリンの寵臣)の日本亡命

～現下のロシアによるウクライナ侵略を遠景に捉えながら～ 報告者：上杉 一紀



ゲンリフ・リュシコフ (1900-1945)

フルシチョフによる「スターリン批判」(1956)に20年近く先駆けて、他国には嚴重に秘匿されていた恐怖政治の実態を日本から世界に向けて告発したソ連秘密警察の高官がいた。日中戦争勃発のタイミングで、NKVD(内務人民委員部)の中央幹部から極東地方本部のトップに転出したゲンリフ・リュシコフだ。ウクライナ生まれのユダヤ人。彼の名は、緊迫する満ソ国境を舞台に起きた亡命事件の主役として当時の日本人に強い衝撃を伴って記憶されたが、やがて忘れられた。

唯一神としての地位を没するまで保ち続けたスターリンは、側近と呼んでいい党、軍、秘密警察の高官を容赦なく使い捨てた。忠誠心を試す形で、国民の憎まれ役をあれこれ務めさせておいて、その口封じをするかのように銃殺、あるいは収容所送りにする。前年まで確かにスターリンの寵臣だったリュシコフさえ、さすがに動揺し葛藤した。熟考の結果が、一か八かの国外逃亡だった。1938年夏のことだ。

トロツキーを除けば、ソ連史上最高位の海外亡命者(=裏切者)とされるリュシコフのソ連邦論、人柄、亡命後に果たした役割、私生活、そして最期の時はどうだったか。伝説のスパイ、ゾルゲはモスクワからの厳命を受け、リュシコフ関連情報を掴もうと危ない橋を渡る……。

日ソ秘密戦の観点から、ソ連崩壊後の研究成果を踏まえ、歴史の闇に消えた亡命者の軌跡をあらためて辿り直す。その試みはおのずから、現下のウクライナ侵略戦争をも遠景に捉えるものになるはずだ。

●上杉 一紀(うえずぎ かずのり)

日本放送作家協会会員。1953年札幌生まれ。早稲田大法学部卒。元北海道テレビ放送勤務。主にニュース、ドキュメンタリー制作など報道畑を歩いた。著書に「ロシアにアメリカを建てた男」(旬報社)、『ロマノフの消えた金塊』(東洋書店新社)、『ソ連秘密警察リュシコフ大将の日本亡命』(彩図社)



東京日日新聞 昭和13年7月2日



リヒャルト・ゾルゲ (1895-1944)



スターリン(左)と
ゴーリキー